

## 第67号

令和6年  
5月1日

題字  
植木 満  
初代東進会会長



## 発行所

土浦一高東進会

〔茨城県立土浦一高  
進修同窓会東京支部〕

## 発行人

東進会会長 飯塚 哲哉

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館6階

宮崎法律事務所 気付 東進会事務局

TEL (FAX) 03-5421-5321

E-mail : toshinkaisecretary@gmail.com ホームページ <https://to-shin-kai.jimdo.com>



夜桜幻想 (土浦市真鍋小学校) 提供 青木 功 (フォトグラファー 昭和50年卒)

## ■ 『令和6年度ご挨拶』

東進会会長 飯塚 哲哉 (昭和41年卒)

## ■ 第28回アカンサスクラブ講演録

『モンシロチョウを生成文法で解剖する』

佐野 真樹 (昭和50年卒)

## ■ 第29回アカンサスクラブ講演録

『祭りが仕事? 神主さんの日常と

「石岡のおまつり」』

石崎 貴比古 (平成9年卒)

## ■ 特別寄稿

『温浴施設のビジネスモデル』

鈴木 正守 (平成6年卒)

## ■ 第17回リレー放談

『“聴く” ～進化の糸口～』

野口 稔 (昭和52年卒)

## ■ 令和6年度総会のお知らせ

## 『令和6年度ご挨拶』

東進会会長 飯塚 哲哉  
(昭和41年卒)

会員の皆様並びに本会にご支援を頂いております関係者の皆様には、いつも当会発展の為にご尽力いただき、心から御礼申し上げます。東進会会長就任以来10年目となり、改めて各位の温かいご協力に感謝申し上げますと存じます。

令和6年は、元日早々に石川県能登地方を最大震度7の大地震とそれに伴う津波と火災が襲いました。そしてその翌日には羽田国際空港C滑走路にて日本航空の旅客機と、まさに能登地方へ支援物資を運ぼうとしていた海上保安庁の航空機とが衝突するという痛ましい事故が発生しました。災害大国とは申せども、かくも立て続けに発生する大きな災害には暗澹たる思いを禁じ得ませんが、常に逞しく復興に立ち向かう人々にむしる力を得る思いも致します。ご遺族や被災された方々にはお悔やみとお見舞いを申し上げます。

世界もコロナ禍が落ち着きを取りもどす暇も無く、一昨年2月に勃発したロシアによるウクライナ侵略戦争が早くも3年目となりました。更に昨年末10月に勃発したイスラエルとパレスチナの悲惨な戦争が長期化しようとしています。加えて今年、世界各国で重要な選挙が予定されていて、不安定な国際関係の到来が予想されています。

東進会は進修同窓会東京支部という事で、「地理的にまたは精神的に」東京にゆかりのある土浦一高OB/OGの皆さんが会員対象で、現役世代とベテラン世代が比較的集まりやすい地域・環境にあると感じますが、それでも、近年ベテランと若手の比が増大している印象が否定できません。日本の産業界等の協会組織では、現役世代の会員が中心であり、運営事務局が専任あるいはそれに近い形のスタッフによって運営されているのが一般です。しかし、東進会のような同窓会という組織では、構造上そうすることは困難です。どうしても、主な業務の傍らにおいて手弁当で活動する役員、委員、会員による運営とならざるを得ません。しかし、それでも学び舎を共有した仲間が集うことは意義があり、楽しいことであり、会員自身の本来業務に貢献することも少なくありません。手弁当というハンディキャップを背負いながらも、いつも東進会運営に汗を流して下さる関係者の皆様には感謝の

気持ちでいっぱいです。

東進会の重要な事務局的作用を企画委員会が担っています。これまで昭和46年卒の小野幹夫副会長を中心に、今後は昭和50年卒花上克宏筆頭副幹事長が中心となつて運営して頂きます。

東進会の代表的な活動の一つである謳粋会は毎月第2木曜日に欠かすことなく開催され、本年3月14日(第281回目)となりました。昭和40年卒の廣瀬巳良謳粋会会長を中心に、世代を超えた充実した交流の場が毎月継続されています。そして謳粋会の幹事会と前述の企画委員会は、謳粋会の翌週、毎月第3木曜日に開催されています。これも熱心な幹事役員や会員の皆様のおかげで、しっかりと継続されています。



第281回 謳粋会 (令和6年3月14日実施)

また毎年3、9、12月の年3回開催されますアカンサスクラブも、昭和50卒花上克宏実行委員長の下、コロナ禍の中も、インターネットを活用し、リモート形式にて継続して参りました。今年の3月7日に開催されました第29回アカンサスクラブは、石岡市の常陸國總社宮の神主の平成9年卒石崎貴比古さんから、日本の神道や「石岡のまつり」などについて大変興味深いかつ貴重なお話を伺いました。

また、土浦一高OBゴルフ会とは別に、東進会ゴルフ部としてのゴルフ会も、昭和46年卒小野幹夫幹事(副会長)の下で、毎年秋に行われて来ました。

そして東進会の最も中心的なイベントが総会になります。今年6月9日(日)に予定されています。今回は役員改選、規約改定など節目の年になります。世代交代も強く推進すべきと思っております。またOBによる興味深い講演なども用意されており、詳細はこの東進67号に記載されておりますので、是非、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。



## 第28回アカンサスクラブ講演録

## 『モンシロチョウを』

## 生成文法で解剖する』

佐野 真樹 (昭和50年卒)

言語に対する常識的な見方として、コミュニケーションの道具であるというのがあります。しかし私たちは、たとえ目の前の人に例えれば日本語という言語で「きょうもいい服着てるね！」などと言っている時でも、同時に心の中で日本語で「ダサイ服だなあ」などと思っっています。さらに独り言を言う時や、これからの予定を考える時も、言語を使っています。また寝ている時も、夢の中の相手に対して言語を使って話すだけでなく、夢の中の自分自身の心の中で、「雷が落ちそう」などと言語を使って考え

ています。これらはすべて、現実世界の人のコミュニケーションとは、つまり、言語というの、コミュニケーションとは無関係に存在します。

生成文法によれば、コミュニケーションとは無関係に存在する私たちの言語は、それが何語であっても、言語表現を作るための、共通の操作を持っています。それは、要素と要素を組み合わせてより大きな要素(まとめ)を作っていくという、併合(Merge)という操作です。この併合は、繰り返し使うことで、無限の長さの言語表現を無限の数だけ生み出す(生成する)ことを可能にし

ます。算術の足し算などが何回でも繰り返しできるのと同じです。ただし足し算とは違って、併合できるのは1回につき2つの要素だけで、3つ(以上)の要素を一度に併合することはできません。これは、自然(Nature)は必要最低限のことしかしないという、最少努力の原理(自然法則)によるものです。

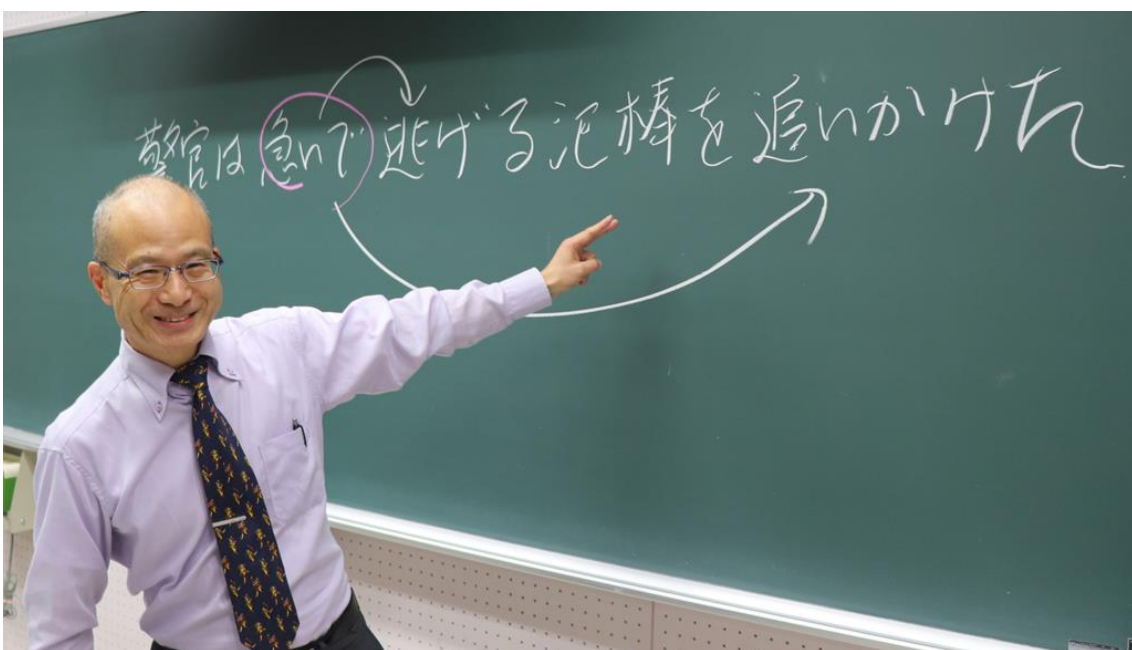
このように生成文法は、言語を自然科学の対象として説明するものです。そもそも併合という操作をするためには、併合の対象となる要素は最低2つ必要ですが、3つ(以上)は必要ありません。この、一度に2つだけの要素の併合を繰り返すことによつて、例えば、「水戸」と「納豆」と「協会」という3つの要素が与えられた時、まず1回目の併合操作として「水戸」と「納豆」という2つの要素を併合し「水戸納豆」という1つの要素(まとめ)を作り、次に2回目の併合操作として「水戸納豆」と「協会」という2つの要素を併合して「水戸納豆協会」という、〈水戸納豆の協会〉という意味の表現ができます。あるいは、1回目の併合操作として「納豆」と「協会」という2つの要素を併合し「納豆協会」という1つの要素(まとめ)を作り、次に2回目の併合操作として「水戸」と「納豆協会」という2つの要素を併合して「水戸納豆協会」という、〈水戸の納豆協会〉という意味の表現ができます。結果、

「水戸納豆協会」という、一見3つの単語が並んだ表現は、〈水戸納豆の協会〉という意味と、〈水戸の納豆協会〉という意味とで、曖昧な表現となります。これは、「水戸」と「納豆」と「協会」の3つの要素を(自然法則に反し)一度に併合してしまつてはできません。つまり、要素を一度に2つずつという、自然法則にかなつた併合によつて、コミュニケーションには支障をきたす曖昧な表現が生まれることとなります。これは、そもそも自然言語はコミュニケーションのためにできたのではないことを考えれば、驚くことではありません。

「にせ」と「たぬき」と「しる」という3つの要素があつた場合は、「たぬき」がまず「にせ」と併合すると「にせだぬき」という、連濁を起こした1つの表現ができ、それに「しる」がさらに併合すると、「にせだぬき」じるという、さらに連濁を起こした、〈にせだぬきの汁〉という意味の表現ができます。一方、「たぬき」がまず「しる」と併合すると、「たぬきじるという、連濁を起こした1つの表現ができ、それに「にせ」が併合すると、「にせたぬきじるという、今度は新たな連濁を起こさない、〈にせのためき汁〉という意味の表現ができます。「た」が「だ」と連濁しないのは、「たぬき」が「にせ」と併合していないからです。「尾白鷺」がオジロワシと、シが

ジに連濁しているのに対し、「紋白蝶」はモンシロチョウと、シがジに連濁しないのも、何が何と併合しているかで説明することができます。

2つずつの併合による曖昧性は言語に関わらず遍在します。「大きな車のドア」、英語ではblack taxi driver、少し難しいですが「警官は急いで逃げる泥棒を追いかけた」等々、みなさんも作ってみてください。



【佐野 真樹 立命館大学  
言語コミュニケーション学域教授】

## 第29回アカンサスクラブ講演録

## 『祭りが仕事？神主さんの日常と』

「石岡のおまつり」

石崎 貴比古(平成9年卒)



私は父が宮司を務める常陸國總社宮という神社において神職として奉仕しています。神職とは神社本庁包括下の神社で働く神主の正式な呼称であり、全国で約2万人が奉職しております。茨城県では約600人の神職がおります。

神職のうち会社で言えば社長に当たるのが宮司であり、私は副社長や専務に当たる禰宜という役職に就いています。その他、複数の権禰宜とアルバイトの巫女が在職しています。神社本庁の神職は5段階の免許である「階位」と、年功序列による等級である「身分」により分ります。袴や装束の色は身分に基づいて変わります。神社は一言で言えば「神様のお屋敷」なので、神職はあくまで脇役。目に見えぬ神様と、氏子や崇敬者と

の間を繋ぐことを生業とするため、その役割は「仲執り持ち」などとも呼ばれます。

一般的な神社は規模の大小を問わず宗教法人として登録されていますが、その実践する「宗教」は神社神道と呼ばれます。天理教や生長の家といった神道系新宗教と大別され、神社本庁に包括される約8万の神社はその施設になります。私が奉職する常陸國總社宮はそのうち茨城県に存在する約2460の神社の中の一つです。

常陸國總社宮が鎮座し、私が暮らす石岡市はかつては常陸國の国府がおかれしました。国府の長官には様々な役割がありました。その最たるものが、自分が統治する国の様々な神々を大切に祀るというものでした。一ノ宮鹿島神宮をはじめ国内の有力な神社に対する巡拝は、次第に国府における遥拝の祭祀へと変遷します。常陸國の国府において国内のあらゆる神々に祈ることの出来る祭場として創立されたのが、常陸國總社宮です。こうした形式の神社は総社と呼ばれ、全国に55社ほど存在が確認されています。

神社における神職の最も重要な仕事として「祭りの奉仕」があります。祭りとは必ずしもフェスティバルのように賑やかなものばかりではありません。そもそも「祭」という漢字は「人が神さま(のような目上のもの)に食物を献じる」という語義が

あります。目に見えない神様に対して感謝を捧げる儀式が「祭り」の本質と言えます。

それぞれの神社では一年に必ず一度、最も大切な祭りをを行います。これを「例祭」と呼び、神社本庁の規定上「大祭」と言う格式で行うため「例大祭」と通称されます。大祭の中には例祭のほかはその年の五穀豊穡を祈る祈年祭や、豊作を感謝する新嘗祭などがあります。

常陸國總社宮の例大祭は通称「石岡のおまつり」と呼ばれる盛大な祭礼です。毎年9月15日の10時から祭典(式典)を行い、それに伴い、敬老の日を最終日とする三連休に賑やかな行事が行われます。土曜日は「神幸祭(じんこうさい)」と呼ばれ本殿から祭神が大神輿に乗って街中へお出ましになります。氏子36町内の代表者と、それぞれの町内の幌獅子は大神輿に付き従って行列を組みます。これを「供奉行列」と呼びます。大神輿は氏子のうち古くからある15の町内へ一年交代で渡御します。当番になる町内は「年番町」と呼ばれ、神様をお迎えする仮の社「仮殿(かりでん)」を町内に設けて祭神を歓待する役目を負います。

日曜日は「奉祝祭」と呼ばれ、江戸時代から続く神賑行事である奉納相撲や、染谷地区に伝わる神楽の奉納、獅子や山車の大行列などが行われます。

最終日となる月曜日は「還幸祭」

と呼ばれ、神様が仮殿から本殿へと戻ります。大神輿が神社に戻ると交通規制が解かれる夜中まで、各町の出し物は市中で名残りを惜しみます。当神社の例大祭で見られるのは3つの出し物です。そのうち「幌獅子」は石岡独自の出し物で、縦横約60cm、重さ約20〜30kgの木彫りの獅子頭に幌を被せた屋台が胴部として附属し、内部に囃子方が乗り込んで行道します。嘉永7年(1854)の記録に見られる土橋町の獅子舞が原点と考えられ、現在32町33台の幌獅子が出されています。

2つ目は二層や三層からなる江戸型の山車です。きつね、ひよつとこ、おかめの踊りや笛や鉦を正面の舞台で行い、太鼓は側面で行います。現在12町12台が出されています。全町唯一の出し物が富田町の「ささら」で、一人立ちの3人一組からなる三匹獅子舞の一種であり、大神輿の露祓を務めています。

これら3種の出し物は「常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら行事」として令和3年10月2日に石岡市指定無形民俗文化財に指定され、最終的には国指定を目指して関係者が保護・継承活動に尽力しています。「石岡のおまつり」の通称通り、旧石岡地区の住民が総出で祝うほか、全国から観光客が訪れ、令和5年は3日間で52万3千人を数えました。

戦前の神社は国の機関であったため神職も役人として俸給を得ていま

したが、今日の神社は宗教法人として独立採算制で運営されています。一般の企業とは異なるとはいえ、多くの皆さんに関心を持っていただくために全国の神社では様々な努力をしています。私も常陸國總社宮で仕事をやるようになって以来、様々な取り組みをして参りました。例えば10年前に45歳以下の若い氏子さんで作る「氏子青年ひたみち会」を設立し、神社の様々な行事に協力していただく体制を確立しました。また、石岡市とゆかりのある漫画家の手塚治虫さんとのコラボレーションを実現し、お守りや絵馬などに手塚作品のイラストを使用することで、それまで神社に関心が少なかった方々にもご参拝いただけるようになりました。

私は神社での活動とは別に研究活動を行っております。母校である東京外語大で博士号を得て以来、同大の特別研究員として、日本とインドの関係の歴史について研究を進めています。最近では昨年国際学会で発表した内容が、インドで出版された論文集に収録され、駐日インド大使から献本を受けました。また仏教者との交流も積極的に行っており、先日浄土宗広島青年教師会において講演を行いました。

同窓生におかれましては石岡においでの際には、常陸國總社宮にお参りいただき、是非、お声をかけていただければ幸いです。

## 特別寄稿

### 『温浴施設のビジネスモデル』

鈴木 正守 (平成6年卒)



私は約14年「極楽湯」というスーパー銭湯運営会社でCFOという財務の仕事をしていました。金融機関やアナリスト、株主との窓口で、色々な人にビジネスモデルをお話させていただきました。

今回はその中でも「温浴施設のビジネスモデル」について、皆さんもご興味があると思いますのでご説明させていただきます。もしご興味を持っていただけたら、株式を買うもよし(優待あり東証2340、約4万円(2024年3月時点))、お店に足を運んでいただくもよしで、身近にスーパー銭湯を感じていただけたらと思います。また、その際は、競合といわれる他のお店に行っていたとしても構いません。やはり近くが一番なんです。是非スーパー銭湯というのを肌で感じてもらい、お風呂に浸かって、この後の話を思い出していただけたら幸いです。現代は一家にお風呂が99%ある中で、外のお風呂に行っても入ることは、やはり特別な空間の演

出を期待されているかと思えます。それは本当にありがたいことです。日本に生まれた醍醐味として、少しでも広い風呂、高い天井、裸で外を歩く露天風呂を堪能してもらい、日々のストレス解消、さらに自分を解放(介抱)していただければ、と思っております。

改めまして、平成6年卒の鈴木正守と申します。出身は取手の藤代、藤代南中でございます。部活は中学からソフトテニス部でして、放課後はナイターを点けるまで運動し、その後夜食を食らい、夏にはプールに飛び込んで、水球を楽しんだ記憶が懐かしいです。クラスはE組で理数科でした。担任は白田先生(数学)で、3年間同じクラスでよい仲間に出会えました。

高校時代はまだカラオケが1曲いくらの課金の時でして、米米CLUB(茨城)、TMネットワーク、岡本真夜、ZARDなどCDやMDで聞いていた世代でございます。長渕剛の「乾杯」もこの頃、聞いていました。KANの「愛は勝つ」やサザンオールスターズの「Ya Ya Ya(あの時代を忘れない)」はクラス皆で歌いました。1991年〜1994年の歌はこの年になつてもカラオケで歌っております。

私はひよんなことから、お風呂業界に入り、一旦そこを辞めたのですが、そして請われてまた古巣のお風呂業界に戻ってくるという経歴があります。小さな会社を色々渡りドン・キホーテのような大きな会社も経ていますが、どうぞよろしく願い申し上げます。

お風呂業界は、簡単に説明しますと

大きく3つに分けられます。(1)銭湯(2)スーパー銭湯(3)大型温浴施設です。複合的なのが通常なので定義できない(未分化)のですが、私なりの区分をいうと、何でもある滞在時間が5時間程度というのが(3)大型温浴施設です。

そこからスリム化(好いと取り)したのが(2)スーパー銭湯でして、主にこちらも3つ、①お風呂と②食事、そして③マッサージが通常セットでして、だいたいお風呂で1時間、その他付帯で1時間で2時間程度の滞在時間をイメージしたお店です。

最後(1)銭湯はお風呂のみ、もしかしたら小さなサウナもついているかもしれない、そしてだいたい500円が入れるというお店です。極楽湯は(1)から(3)まで全部あります。メインは「極楽湯」のブランドですが、この他にも鶴見川崎(神奈川)にある「RAKUSPA(楽ス。P)」のブランドで(3)の大型温浴施設も運営しています。

またこのノウハウを展開して、フランチャイズもしています(高尾山(東京)、仙台、大阪)。加盟企業は鉄道会社や上場会社となりますが、それは投資額が大きいからで、個人の資産では到底できない金額が必要だからです(10億円以上)

話は戻りまして、業界としてはそれぞれ滞在時間が違うため「お客様単価」もそれに応じて変わってきます。例えば(1)銭湯だと500円程度の入館料に付帯があまり望めませんので、100

0円以内。(2)スーパー銭湯だと御食事がマッサージのどちらかは利用する方が多い為、1000〜1400円。(3)大型温浴施設だと、食事を2回と付帯も利用するので、2600〜3000円程度となります。

(2)スーパー銭湯と(3)大型温浴施設の入館者数は実は、ほぼ同じです。

(お客様単価は違います)。そして、損益分岐点ですが、固定費がかなり高いです。それは、お客様が来ても来なくてもお湯は沸かさないとけない為、水道光熱費が地代並に売上高構成比を占めているからです。その損益分岐点は、だいたいコロナ前の売上で93%程度で、コロナ後は90%ぐらいまで下がりましたが、また最近では上がってきており、現在は93%程度にまた戻りつつあります。

新聞で見ましたが、リンガーハット(長崎ちゃんぽん)社も93%と以前みつけました。飲食なのになぜそんなに高いのかなあと思ったのですが、多分ショッピングモールみたいな所に出店すると、地代(賃料)が相当高いのでは、というのが私の見合いで、温浴施設のような投資額が大きいという意味ではないように思います。

話は戻りまして、固定費の主な内訳は、人件費・減価償却費・水道光熱費・地代でして、まずこれらを回収して初めて利益がみえてきます。イメージで説明すると、(2)(3)のお店はホテルや旅館のような施設を作るのに投資額が高く、飲食店のように予約がなくお客様を受け入れる施設なので、お客様単

価はそこまで高くはないというポジションであります。

これを経営するのは簡単ではなく、コロナ前は常に値下げ圧力と、光熱費の高騰で利益がでてもしないので苦労しました。そんなお客様単価なので、新型コロナウイルスにより経営が先行きいかなかった時は本当にまいりました。

ただ、ここでデフレが終了し、値上げをお客様が許容していただける環境が、2021年夏頃の外資ホテルの値上げをキッカケにみんなに広がり、現在に至ります。

コロナ前は10円値上げするだけで、他社がそれを期に値下げし、来店するお客様数が10%減るといいう状況でしたが、タイミングをみながら50円ずつあげさせてもらい、コロナ禍後期2年で、全体では180円ぐらい温浴単価は上がりました。(お客様単価はつられてもつと上がっております)

こういうビジネスモデルは、結果として損益分岐点を超えた部分の利益は丸々全て利益と思っていたら結構です。結果として大きな試練を乗り越えたことで筋肉質の会社に生まれ変わりました。

このようなビジネスモデルを「装置産業」と言われます。メーカーや情報コンテンツビジネスに通じる所があり、他方、ホテルや旅館と違い事前に予約して来るわけではないのでお天気にも左右される特徴もあります。

そして、「平日と土日祝日の変動」と「季節的変動」という特徴があります。

だいたい平日の来店客数は、土日祝日の6割ぐらいです。(2)スーパー銭湯の場合)

「平日と土日祝日の変動」

土日祝日に来られる人の多くはいつも温浴施設が混んでいるから凄く儲かっていると思いがちですが、我々運営側は如何に平日を埋めるかが、運営していく上で非常に大事となります。そして、平日戦略と土日戦略で異なるのですが、平日のお客様はかなりのリピーターなので、少しずつ積上げ、土日祝日のお客様は家族連れが多いので、イベント(お絵かき大会やゲーム大会)やキャラクターコラボ(ポケモン、鬼滅の刃、呪術廻戦、ワンピース、ハイキューなど)で楽しさをメインに演出しています。極楽湯はどちらかという癒やしや健康というより、エンターテインメント寄りの戦略が特長です。(極楽は極めて楽しいというニュアンス)

「季節的変動」

これは上述の平日と土日祝日の延長ですが、4月〜6月はゴールデンウィークしか長期休みが無い為、利益はそんなに出ません。第二四半期である7月〜9月は夏休みが入っているため、土日並の売上が連続して出ますので利益がたまりません。特に8月のお盆は繁忙期でして、社員総出となります。10月〜12月は季節も寒くなってくるため日々のお客様が各店50人ほど増えるため4月〜6月より稼ぎますが、こちらも大型連休が少ないためそれほど稼がず、寧ろ1月の繁忙期に備え店休など入れ

てお店のメンテナンスをいたします。1月〜3月は「初風呂」と言われ、お盆以上に稼ぎます。だいたい成人式までが繁忙期となります。このようにB to C(会社から個人へ)のビジネスですが、冬に向けて売上があがっていく珍しい傾向であります。

最後に、温浴施設のビジネスモデルをご紹介してもらいましたが、会社というのは社会的に求められているから存在し発展できますので、目の前のお店やビジネスは全て必要だと言えまじ、社会貢献していると言えます。ただ、店舗運営のその土台は人口が大きく影響するので、地域の人口の増減は実はずも大きな問題です。人口減少は仕方ないのですが、このような店舗運営はお客様単価を上げ、お客様数が減ってもその事業を継続、雇用を維持していくことが今後大事な視点となります。

皆様がいつも利用している目の前にあるお店が急になくなったら困ると思います。そうなる前に「敢えて」利用することで、自分のお住まい近くのお店を応援していただくと地域も活性化しますし、人の流入、または流出を防ぐかもしれません。ネットでの購入もいいのですけれども、お風呂を含む生活に必要なお店を積極的にご利用していただけるとありがたいなと思つて、今回はご紹介させて頂きました。

## 第17回リレー放談

『「聴く」の進化の糸口』

野口 稔(昭和52年卒)



1つの体験を紹介したいと思います。30代前半、半導体向け「光学検査装置」の開発に携わっていました。半導体の製造では微細なゴミや欠陥の混入が許されません。これらの欠陥を検出するのが「光学検査装置」です。私が所属していた研究開発部門に、京都にあるH製作所から入社数年目2人の実習生がやってきました。「おもしろおかしく」を社是とする会社だけあって、活発に意見を言う方たちでした。ある時、「こういう実験をし続けるより光学系のシミュレータを作った方が、効率が上がるのではないか。」と意見してきました。当初、「特殊な構造の光学系なので、シミュレータの開発など無理なことだ。」と取り合いませんでした。熱心な彼らの話を「聴く」うちに、いくつかの制約条件を設けることで、シミュレータが作れるのではないかと考えに至りました。結果、照明の角度、コヒーレンシー、

捕捉する光束の位置、結像系その他のいくつかのパラメータを変えることができるシミュレータを構築することができたのです。このシミュレータは、その後の光学検査装置の開発で大きく役立つものでした。また、このシミュレータを使った数値実験を繰り返す中で、面白い現象に気づき、検査装置だけでなく半導体露光装置を延命する技術の一つを見つけたことができました。この技術は、後に、半導体事業部門とある半導体メーカー群から一定規模のライセンス料を取得することに繋がりました。あの時、彼らとの会話を持たなかったら起こらなかったことです。なぜ「聴く」たのかわかりませんが、ただこの体験は、当時、「この分野、チームの中で自分が一番わかっている」と思っていた私にとって大きな変化点となりました。理解できない考え方、自分と異なる発想は、とかく「外野の意見」、「素人の思い付き」としがちです。これら異質なもののなにも、技術が進化する糸口、ヒント、きっかけがあり得る、と言う1つの事例だと思います。侃々諤々の議論をする、とよく言います。どちらかの意見を通す、と言うニュアンスに捉えられがちだと思います。「議論」には、どちらかの意見を取り入れるということではなく、別の視点から見たらどう見えるかを、「聴いて」理解することにこそ、より大切な価値がある。そこに進化の

糸口があり得るから。」との認識に立てたのです。ダイバーシティの観点からも、異なる考え方や発想に触れたとき、それが理解しえないと思えるものであっても、それを「聴こう」とする姿勢、柔軟性が新たな価値を生むきっかけ、進化の糸口になるのではないのでしょうか。似たような話に「○△□の話」というのがあります。どこかで聞かれたことがあるかもしれませんが、ある人が「私が見たのは丸い形をしていました。」と。別の人は「いや、違うよ。三角形だった。」また別の人は「間違いなく四角形だった。」と。果たして、誰の話が本当なのか、という話です。技術系の採用面接の際、この「問題」を質問していた時期が有ります。「上から見て○で、前から見ると△、横から見ると□。そういう物体を描けますか。」と。そうなのです。先の3人のお話は、見ている場所、視点の位置が違っているのです。視点の位置、つまり見る方向が違ったら、同じものも同じには見えません。面接では2割程度の方にしか答えてもられません。与えた時間が長いわけではありません。突拍子のない問いかけに面食らったということもあるでしょう。ところが、ある時、ある傾向に気づきました。機械系学生の正答率が高いのです。機械系の学生は、図学、機械図面を演習しま

す。「三面図」と言われる図面です。「上から○、正面から△、横から□」をそのまま「三面図」に書き落とすと、立体形状が浮かび上がってくるのです。この話には、大切な2つの観点が潜んでいると思うのです。「意見の違い」は、視点の違い、重要視している観点の違いのケースがある。ということ。そして、「この意見の違いを「つなぐ」のに役立つ「ツール」があり得る。」ということ。 「視点の異なる相手の意見を「聴いて」理解するためには、例えば、「三面図」のような「つなぐツール」が役立つ。言い換えれば、そういう「ツール」をどれだけ持っているかが、柔軟性を強め、ダイバーシティを進めるポイントになる。」

○と見えるのも、△と見えるのも、事実です。それぞれ間違っていない。ただ「断片」なのです。それらを「つなぎ合わせて」、始めて、真実に近づく。断片的な事実を主張しあう議論でなく、例えば、「それが矢張り状の立体であること」を共有する議論、それが「聴く」時の一つの考え方なのかな、と思う次第です。一度はそれぞれの意見が事実であることとを前提にしてみる、その結果としてぶつかっていた意見の解決策が見えてくる、そういうことがあるように感じます。(ところで、「○△□立体」とググると、ChatGPTに聞くまでもなく、この立体の形状を見るこ

とができます。) 次回は昭和52年卒の矢崎弥さんにバトンタッチします。

【略歴】1982年東京大学工学部卒、(株)日立製作所生産技術研究所(戸塚)に入社。半導体製造検査装置の開発に従事。93年コロンビア大学研究員。04年から(株)日立ハイテク。

#### 【編集後記】

初田正雄先輩(昭和41年卒)のご指導の下、会報「東進」第49号第50号の編集を、第51号からは自ら編集を手掛けさせていただきました。

この度、鈴木正守さん(平成6年卒)が、第68号以降を担当していただけることになりましたので、この場をお借りしてご報告申し上げます。

鈴木さんは今号にもご寄稿いただいています。これまでとは違った、新しい感覚で会報「東進」を編集していただけるものと期待しております。

これまでわたくしの拙い編集の会報「東進」をお読みいただき、誠にありがとうございます。

東進会の益々の発展と、総会が成功裏に終わりますことを願って編集の任を下ろさせていただきます。星川美代子(昭和50年卒)

## 令和6年度 総会・懇親会のお知らせ

- ・日時： 令和6年6月9日(日)
  - 12:00 受付開始
  - 13:00 総会
    - ・開会の挨拶
    - ・来賓挨拶
    - ・東進会会長挨拶及び議案審議
    - ・事業報告決算 事業計画予算
    - ・役員改選及び会則変更
    - ・閉会の挨拶
  - 13:30 講演
    - 『京都文化の過去・現在・未来～  
歴史・文化財、そして観光～』
    - 石川 登志夫(昭和50年卒 京都産業大学文化学部教授)
  - 14:40 懇親会
  - 16:30 閉会
- ・場所： 学士会館 210号室  
千代田区神田錦町3-28 03(3292)5936
- ・参加費： 10,000円(当日の受付混雑を避けるため、極力振り込みにご協力ください)
- ・年会費： 3,000円(総会に参加されない方)いずれも同封の振込用紙をご利用願います
- ・司会： 伊丹 牧子(平成7年卒)
- ・当番幹事： 花上 克宏(昭和50年卒) 海野 章(昭和52年卒)  
櫻井 成一朗(昭和55年卒) 永沼 成子(昭和55年卒)  
浅野 寛(昭和56年卒) 鈴木 正守(平成6年卒)